

1 . 使徒となったパウロ

・私が使徒となったのは、人間から出たことでなく、

また人間の手を通したことでなく、

イエス・キリストと、

キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によったのです。・・

2 . および私とともにいるすべての兄弟たちから、ガラテヤの諸教会へ。

3 . どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。

4 . キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。
私たちの神であり父である方のみことろによったのです。

5 . どうか、この神に栄光がとこしえにありますように。アーメン。

1 . Pauloj apostoloj

ouk apV anqrwpwn

oude. diV anqrwpou

atla. dia. Ihsou/ Cristou/

kai. qeou/ patroj tou/ egeirantoj auton ek nekrown(

説教

パウロはガラテヤ人への手紙の冒頭で異例の自己紹介をします。

その際、彼は単に自らが「使徒」であることを名乗るのみならず、

その使徒職の権威がどこに由来するものであるかを明らかにするのです。

どうしてでしょうか？

それは、ガラテヤ教会の中にパウロの使徒性を疑う者がいたからです。

ガラテヤ書の重要なテーマは、

「律法を行い、割礼を受けなければ救われない」と説く、ユダヤ主義者たちに対するパウロの反駁です。

ユダヤ人にとっては小さい時から厳しく教育されてきた旧約の律法です。

イエスさまを信じて

永遠のいのちをいただいたはずのキリスト者の中にも、

ユダヤの古い考えが自分の中に勢力を巻き返してきて、

律法による行いによって救われると考える者が出てきても不思議はありません。

現に、エルサレム教会のリーダーであるペテロもこの考えに巻き込まれていたことが同じガラテヤ書に記録されています。

それで、パウロはこの考えを真っ向から否定します。

ただキリストの十字架の恵みによって救われると説きます。

ペテロに対しても、その恵みを忘れたのか、と胸ぐら？む勢いで襲いかかります。

このような恵み一辺倒の議論を激しく展開するパウロに対して、ユダヤ主義者たちは反発をします。

そして、自分たちの論を否定するパウロを攻撃するため、パウロの「使徒性」にイチャモンをつけてきたのです。
ユダヤ主義者のパウロに対する攻撃の論点は、要するに、
「あのパウロという奴は、あんな偉そうに教えているが、
しかし、あいつはイエスさまの生きておられた時にはイエスさまに会っていないじゃないか。
そもそも使徒というのは、
イエスさまに直接名指して任命された十二使徒（マタイ 10:1）と七十人使徒（ルカ 10:1）を言うんじゃないか。
それなのに、あいつはその中に入っていない。
イエスさまから直接任命された所を誰も目撃していないんだ。
だから、単にはったりかましてそう自称しているだけの要するに“自称使徒”なんじゃないか。」というものでした。

これに対して、パウロは、
自らが「使徒」となったのは、
自分で勝手に自称しているのではなく、
また誰か他の人間から任命されてそうなったのでもなく、
「私が使徒となったのは、
人間から出たことでなく、
また人間の手を通したことでなく、
イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によった」と反論します。

「人間から出たことでなく」とは、
自分自身の考えや志、願望によるのではないことは勿論のこと、
教会の人々の期待や世の人々の待望によって使徒になったのではない、ということの意味します。

「人間の手を通したことでなく」とは、
自分が使徒になったことが、教会の誰かによって任命された、
あるいはユダヤやローマ帝国といった世俗の権力によって任命されたのでもない、ということの意味します。

それでは、一体、パウロは誰によって使徒に任命されたと言うのでしょうか。

それはまず「イエスキリスト」です。
あのダマスコ途上で「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか。」（使徒 9:4）と彼に現れた復活のイエスさまです。
イエスさまが、彼に直接現れて、
「行きなさい。
わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす。」と、彼を使徒に任命なされたのでした（使徒 22:21）。

そして、パウロはその「キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神」も彼を使徒に任命して下さったと証言します。
「キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神」が、
神の教会を迫害して神に敵対し、罪に死んでいた
自分の罪を贖い、自分を生かし、永遠のいのちを与えて、人々にいのちを与える使徒に任命して下さったというのでした。
このように、パウロは、

人の考えによらず、人の手を通してでもなく、ただ父なる神とイエスキリストによって救われ使徒とされたと証言します。
実際には、それと同時並行で、
復活の主イエスさまはその当時ダマスコにいたアナニヤという弟子に命じて、
そのアナニヤの手によって洗礼を受けることで、パウロは聖霊のバプテスマを受けて救われました。
しかし、だからといって、パウロは、アナニヤによって召命を受けたわけではありません。
そうではなく、ただひとえにイエスさまから召命を受けたと証言するのです。

これはとても重要な点です。

もしも私たちの召命が「人から出た」とするならば、私たちの救いは人の手にかかっていることになります。
そうなれば、人々から望まれ、期待されてるうちはよく頑張って信仰生活に励むことでしょう。
でも、人から期待されなくなったら、信仰も宣教もそれ以上続けていく必要がありません。
それで、迫害が起これば、信仰生活も宣教もやめてしまうことでしょう。

しかし、パウロは「父なる神とイエスキリストから出た」と証言します。
となれば、たとえ人がどう言おうと関係ありません。
反対されても、迫害されても、信仰をやめることはできません。
なぜなら、この救いは「人から出たものではない」からです。
「父なる神とイエスキリストから出た」からです。
たとえ誰かの口を通して福音を聞き、
人の手を通して洗礼を受けたとしても、
永遠のいのちは「父なる神とイエスキリストから」受けました。
福音宣教の使命は、「父なる神とイエスキリストから」受けたのです。

みなさん、私たちのイエスキリストを信じるこの信仰は、神聖なものです。
私たちの信仰は、神さま以外に介入も干渉もすることのできない、絶対的に神聖なものです。
使徒パウロは言いました。

「私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。

患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

『あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。

私たちは、ほふられる羊とみなされた。』と書いてあるとおりです。

しかし、私たちは、私たちが愛して下さった方によって、
これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

私はこう確信しています。

死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、

今あるものも、後に来るものも、力ある者も、

高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、

私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできません。」 ローマ人への手紙 8:35-39

死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、世の世俗の権力であっても、

「キリストにある神の愛から私たちを引き離すことができない」とパウロが後に証言するように、私たちのキリスト信仰というものは、絶対・神聖・不可侵なものなのです。

国家もこれに介入したり、干渉したりできません。

私たちは、神の国に所属しているのです。

見えないけれども、確かに存在して、この世をも支配し、審判するところの、神の国の民なのです。

私たちの国籍はこの神の国にあります。

神の国は、この世から完全に独立しているのです。

完全な独立王国なのです。

私たちはこの世の王国にも存在してはいるけれども、イエスさまが言われたようにこの世の者ではありません。

この世のことも無視するわけではないけれど、それで税金も払い、法律も守るけれども、それはあくまで限定付きです。

神の栄光のためにそうするだけであって、神の栄光にならなければ、それもしません。

抵抗します。

「カイザルのものはカイザルに返すが、しかし神のものは神に返す」のです。

神のものとは何でしょうか。

すべてのものです。

なぜなら、この世界には神のものでないものは一つも存在しないからです。

すべての栄光を神に返すのです。

そして、私たちが神に栄光を帰することを、誰かが邪魔するならば、私たちはそれに抵抗します。

もしも自分の親兄弟が私たちのキリスト信仰に反対して偶像を拝めと強要したら、私たちはそれに従うことができません。

また、もしも国家が私たちのキリスト信仰に介入したり、干渉したり、

あるいは、偶像崇拜を強要するようなことがあれば、私たちはそれをそれをすることができないばかりでなく、

そのように神に背くことを強要する国家に対して、そのようなことをしてはならないと警告を発しなければなりません。

使徒パウロは言いました。

**「私が使徒となったのは、人間から出たことでなく、また人間の手を通したことでなく、
イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によったのです。」**

自分が使徒となったのは、人間によることではない。

神によることである。

父なる神とイエスキリストがこの自分を任命してくださった、

これこそが使徒パウロの確信でした。

そして、これこそが使徒パウロの爆発的な宣教の力の源でした。

復活の主イエスに直接名指しで呼ばれて使徒に任命されたので、人にとやかく言われても、何とも思いませんでした。

自他共に認めるほど、そして後世の代々のキリスト者たちも認めるほど、

パウロほど主のために働いた人はいませんでした。

宣教したエリアはエルサレム、ユダとサマリヤの全土、

小アジアー帯、そしてヨーロッパ、その中心地であるローマにも、

さらにはローマの皇帝カイザルの前に立ってキリストを証し、

それでも飽き足らず当時は地の果へと考えられていたスペインにまで行くつもりであったのです。

また、たとえ教会の指導者に対しても、間違っていることは間違っているとはっきり主張しました。
それで、ユダヤ主義者の教師に対しては勿論のこと、ペテロやバルナバに対しても、公衆の面前で誤りを非難しました。
パウロは、
たとえ世俗の権力であろうと、教会であろうと、世界中を敵に回しても、なすべき自分の使命を果たそうとしたのです。
どうしてでしょうか。
神さまが自分を召したからです。
神さまが自分を使徒に任じたからです。
世の人が自分を使徒職に任命したわけではないからです。

これがパウロの宣教の力でした。
何回投獄されてもめげることなく宣教し続けた彼の力の源は、この召命です。
キリストに召されたという召命です。
自分が使徒であるのは、
自分の考えによるのではない、人の要請によるのでもない、ただ神によって召されたのだという召命です。
それが彼の宣教を支えました。
それだけが、使徒パウロの宣教を支えたのです。

私たちもそうではないでしょうか。
私たちの信仰生活の力は、キリストに召されたというこの一点です。
自分のキリスト信仰は、人から出たことではない、
神から出たことだ、神がこの私を召されたのだ、というこの一点が私たちの信仰の原点です。
また、宣教の力です。
これしかありません。
しかし、これだけあれば、充分です。

共謀罪や教育基本法改正のみならず、
右傾化甚だしい今日、キリスト信仰を告白し続けることが本当に難しい時代になってきていると思います。
埼玉県戸田市の伊藤良一教育長が、市議会で、
市立小中学校での入学、卒業式の君が代斉唱で起立しない来賓について「はらわたが煮えくり返る」と批判しました。
「内心の自由という人がいるようだが、生徒たちの前で規律を乱すようなことがあってはならない」と述べたそうです。
君が代を斉唱しないというのは、何れの信仰にせよ、自分の内面の信仰の告白なのですが、
これからは、偶像崇拜強制反対にせよ、戦争反対にせよ、愛国心の評定にせよ、
いずれにしても、自分の信仰を表現することが難しい時代になって来ると思います。

このような前例として、かつて国家の政策に逆らう者を処罰する「治安維持法」という悪法がありました。
1941年刑罰は「死刑を含む」ものに改悪され、
「国体（国の政治体制）を变革する者」と規定されていた取り締まりの対象は「国体を否定する者」に改悪され、
これにより少しでも国の政策に批判的なことを考えている者、あるいはそれを表明する者は処罰されました。

韓国では、

韓尚東牧師や趙壽玉勸士といった神社参拝強制に抵抗した牧師たちが、釜山の水営路海水浴場で神社参拝反対を話し合ったというそれだけの理由で、改正治安維持法第五条違反

(国体変革を目的とする組織結成のための協議もしくは煽動の罪、最高刑懲役十年)で拘束され処罰されました。

しかし、彼らは、自分たちの信仰と宣教の使命は国家から受けたものではない、神さまから与えられたものだから、自分たちの信仰告白を棄てることはできないとして抵抗したのでした。

殉教した朱基徹牧師は、「今日から説教するな！」と警察に命令された時、こう答えました。

「私は説教権を神さまから受けたので、神さまがやめるとおっしゃればやめるであろう。

しかし、私の説教権は警察から受けたものではないので、警察署がやめると言えるはずがない。」

「説教をやめなきゃ逮捕する。」と脅迫されて、

「説教することは私のつとめで、

逮捕することは警察のつとめだ。

私は私の務めを果たす。」と答えたのでした。

このように、朱基徹牧師は、神のこことばを説教する権限は神さまが下さったものだ、

絶対不可侵なものだ、

国家権力も干渉できないと言うのです。

神がこの権限をくださった、

だから、誰もこれを奪い去ることはできない、というわけです。

「私が使徒となったのは、人間から出たことでなく、また人間の手を通したことでなく、

イエス・キリストと、

キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によったのです。」

私たちも同じではないでしょうか。

私たちは、それぞれ救われてきた背景はみな異なります。

でも、共通しているのは、キリストによって召されたということです。

私たちは自分でキリストを信じたわけではありません。

自分の力で、

自分の努力で、

自分の頑張りで、

自分の根性で、信じたわけではありません。

中には、人から誘われ、あるいは自分でキリスト教に興味を持ち、小説を読んだりして、教会に来て信じた人もいるかも知れません。

自分の家はクリスチャンホームで、親がクリスチャンだという人もいるかも知れません。

でも、たとえ見た目には、人の手を通してイエスさまを信じたように見えたとしても、それらのすべてを用いて、福音を聞かせ、神さまを信じさせたのは、父なる神さまです。復活のキリストです。

ですから、兄弟たちよ。

ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたことを確かなものとしなさい。

これらのことを行なっていれば、つまりくことなど決してありません。

このようにあなたがたは、

私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国にはいる恵みを豊かに加えられるのです。

ペテロ 1:10 - 11

ここに集うみなさん一人一人が、

ますます熱心に、主の召命を確認し、

主の召命に応じて、その恵みを証しし、

主の栄光をあらわして生きて行かれるよう、祈ります。